

世界各地の「読者」と出会う

常川 真央

書物は様々な地域や言語で出版されており、その内容も多様である。同様に、世界各地の読者の姿もまた多様であり、しばしば読書を考えるときに忘れがちな読書体験の地域性を教えてくれる。本稿では、世界各地の「読者」が描かれた書物を紹介したい。

まず、読者と読書環境の関わりを研究した書物として、和田敦彦著『越境する書物…変容する読書環境のなかで』（新曜社 二〇一一年）を挙げる。本書は、アメリカにおける日本語蔵書形成の歴史を明らかにすることで、「読者の環境史」としてリテラシー史という学術領域を打ち立てようとする書物である。著者は、読者が何をどのように読むかは生活環境に制約されると主張する。つまり、各地の読者像を求めることは、その地の環境を知ることにもつながるのである。

集団で行われた読書は、独自の文化形成に寄与することがある。エリザベス・ロング著、田口瑛子訳『ブッククラブ…アメリカ女性と読書』（京都大学図書情報学研究會 二〇〇六年）は、アメリカの女性たちが開く読書会のフィールド調査結果をまとめた学術書である。そこでは、

読書会を通じて参加者のアメリカ女性たちがジェンダー意識を持ち、やがて市民運動へと結びつく様子が描かれている。読書会活動が社会に及ぼす影響を考えるうえで重要な一冊である。読書会と女性というテーマは、アメリカに限らない。アーザル・ナフィーシー著、市川恵里訳『テヘランでロリータを読む』（白水社 二〇〇六年）は、イランの女性たちが開く秘密の読書会について当事者が描いたノンフィクションである。本書は、ナボコフやオースティンなどの異国作家の小説を通じて、イランで女性として生きることについて考えていく様が描かれている。さらに南アフリカの読者について語った図書として、Archie L. Dick『The Hidden History of South Africa's Book and Reading Cultures』（University of Toronto Press, 2012）がある。本書は、南アフリカにおける一七世紀から現代までの読書文化を、行政記録や日記史料に基づき再現することを試みた研究書である。スレイブロッジ、女性の結社、軍事教育部隊など様々な集団の読書活動を描いている。

ブッククラブや読書文化について直接扱った書物以外でも、各地の読

者像が垣間見える。国際文化工房編『私が読んだ日本の本』（国際文化工房 二〇〇六年）は、中国の浙江工商大学日本文化研究所の呼びかけにより、日本語学科を持つ各大学内で実施した日本語作文コンクールの受賞作品をまとめた小冊子であり、『五体不満足』や『電車男』など意外な作品を中国の大学生がどう読んだかが当人の言葉によって描かれている。J・ネルー著、大山聡訳『父が子に語る世界歴史』（みずす書房 一九六五年）は、ネルーが獄中で娘に送った手紙に基づいた世界史として有名だが、第一巻ではネルーが読書について語るところから始まり、本書も読者像が見える書物といえる。池内恵著『書物の運命』（文藝春秋 二〇〇六年）は、「本ばかりあつてほかには何も無い生活というものを強いられて育った」というイスラーム研究者の池内恵氏による、書物をめぐるエッセイ集である。著者が影響を受けた古典から最近のイスラーム関連書まで、様々な書評とともに、エジプトの文字・出版事情を読書家の視点から語っている。

ある地の人々が読者であるためには、識字教育や出版状況などの読書のためのインフラが整備されているかが重要である。和田敦彦著『読書の歴史を問う…書物と読者の近代』（笠間書院 二〇一四年）は、書物が出版される過程と、読者が書物を

読む過程の間に存在する「書物が読者の元に届けられる過程」を解き明かす学術書であり、東南アジア各国の日本語蔵書や満鉄図書館を読書文化の手がかりとして取り上げている。東アジア出版人会議編『東アジア人文書100』（みずす書房 二〇一一年）では、東アジア共同体を生み出すことを目標に、東アジア各国の出版人が、古典として読むべき自国の書物を相互に紹介している。

最後に、読者の居場所としての図書館が描かれた図書を紹介したい。Cronicas, Sergio Zapata León et al.『ここで人々は読書できる…日本の協力と「読書と図書館国家計画」』（Ministerio de Cultura, 2005）は、コロンビア共和国が政策の一環として設置した図書館と利用者の様子を写真付きで紹介した報告書である。シャンティ国際ボランティア会編『図書館は、国境をこえる』（教育史料出版会 二〇一一年）は、シャンティ国際ボランティア会がアジア各地で行った三〇年間の図書館活動を当事者が総括した図書である。アフガニスタン、カンボジア、ラオスの難民キャンプなどで著者らが設置を支援した図書館のなかで、無心に本を読む難民の子どもの写真が多数収録されており、本を読む場の形成支援の重要性を教えてくれる。

（つねかわ まお／アジア経済研究所 図書館）